

ヨハネによる福音書18章1-11節 「一人も失わないイエス」

1A 弟子たちと集まっていた園 1-2

2A ご自分を引き渡す方 3-9

1B イエスを捕らえる者たち 3

2B 「わたしはそれだ」に倒れる者たち 4-6

3B 弟子たちを去らせるイエス 7-9

3A 戦いではなく、父の御心 10-11

本文

ヨハネによる福音書 18 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、17 章まで来ました。今日、午前には前半部分、1 節から 11 節を一節ずつ見ていきます。午後に 12 節から最後まで、40 節を見ていきます。ついに、イエス様が捕らえられる場面に入ります。

1A 弟子たちと集まっていた園 1-2

1 これらのことを話してから、イエスは弟子たちとともに、キデロン谷の向こうに出て行かれた。そこには園があり、イエスと弟子たちは中に入られた。

「これらのことを話してから」というのは、イエス様が 13 章から、最後の過越の食事のところで、弟子たちの足を洗われた後からのことです。イエス様は、互いに仕え合いなさいと教えられました。裏切る者がここにいると言われて、イスカリオテのユダが出て行った後に、「互いに愛し合いなさい」と教えられました。そして、「わたしが行くところに、あなたがたはついて来ることができません。」とも言われました。それで、ペテロが、「主よ、なぜ今ついていけないのですか。あなたのためなら、いのちも捨てます。」とまで言いました。けれども、イエス様が、「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と言われました。そして話は続きます。ご自分が父のところに行ったら、そこに住まいを備えてまた、会いに来ると約束しました。そして、「もうひとりの助け主を遣わします。」とも約束されます。このようにして、彼らが、イエス様がなくなった後で、孤児のように置き去りにされないことを何度となく、安心づけました。

それから、食事の場を離れます。途中で、神殿の敷地にある大きな門を通ったのでしょうか、そこにぶどうの木が装飾されています。そこで、「15:1 わたしがぶどうの木、わたしの父は農夫です。」と言われました。そして、ご自身に留まることの大切さを教えられました。そして、何度となく、「わたしの名によって父に願いなさい、何でもかなえてくださいます。」と約束されます。それから、世から憎まれ、迫害されることを警告されました。けれども、「16:33 勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」と言われました。

そうやってお語りになられた後で、そのまま、父に祈られたのですね。その祈りが、第一に、子の栄光を現してくださいという願いです。イエス様がよみがえられ、栄光の御座に着かれる時、その復活の体、栄光の体には、十字架で打たれた釘の跡、槍で刺された脇腹の跡が残っています。そして、弟子たちのために祈られました。その中で、「17:12 彼らがともにいるとき、わたしはあなたがくださったあなたの御名によって、彼らを守りました。」と言われました。弟子たちが悪い者から守られるように祈られたのです。そして、彼らによってイエスを信じる者たち、つまり私たちが一つになることを祈られました。

このように祈りを捧げてから、今、「キデロンの谷の向こうに出て行かれた」とあります。神殿の丘からオリーブ山に渡る時に、その間には、キデロンの谷があります。その時、過越の祭りでありますから、多くの犠牲の羊が屠られていて、そこに血も流れていたのではないか？と思われる。イエス様は、ご自身がその犠牲になられて血潮を流されることを思われていたかもしれません。そして、オリーブ山のほうに行きました。

そして、「そこには園があり、イエスと弟子たちは中に入られた。」とあります。これが、他の福音書では、ゲッセマネの園と呼ばれるところです。そこで、イエス様が苦しみ悶えて祈られて、「マルコ 14:36 どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」と祈られたのです。この大事な祈りをヨハネが書き記していないのは、他の三つの福音書は十分に、諸教会に伝えられていたからです。ヨハネは、紀元後 90 年代に、福音書、手紙、そして黙示録を書き記しました。その時に、他の人々がまだ書き記していないことで、これは書かないと聖霊に導かれたものを書いています。

ここで、イエス様は、ご自分が全世界の罪の供え物となる、父の願われていることに従う決心をされました。それは、愛されている父から引き離されるおそろしい杯です。主が、取り去ってほしいと願われたのは、罪に対する神の怒りの杯です。それを、私たちの代わりに受けてくださるので。思い出してください、聖書の話というのは、どこから始まりますか？創世記のエデンの園からです。罪が入ったのは、エデンの園からです。エバに対して蛇が惑わし、アダムが妻の言うことを聞いて、神に禁じられていた善悪の知識の木から実を取って食べました。それで、世界に罪が入って行ったのです。私たちの主キリストは、それに逆行して、世界に贖い、救いを与えようとしておられます。罪を身代わりに負われて、人々から罪を取り除き、神のところに帰ることができるためであります。

2 一方、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスが弟子たちと、たびたびそこに集まっておられたからである。

ヨハネは、かなりの回数で、ユダがイエス様を裏切ろうとしていたことを言及していました。ユダがなぜ「裏切り」であるのかと言えば、イエス様が親密に弟子たちと時間を取っていた、いわば私

的な場を知っていたからです。詩篇にある預言に、「13:18 わたしのパンを食べている者から、わたしに向かって、かかとを上げます。」とありますが、パンを共に食べるという、心を明かして一つになって交わるそのような人が、敵になるのです。ここでは、弟子たちにしか知らなかった場を、ユダが通報したのです。そして他の福音書には、ユダが口づけをする人がイエス本人であるという合図をしていたことがわかります。今は真夜中です、そして、当時は本人であるかどうか、顔を照合させる技術ありません。ですから、ユダのような存在はなければいけない存在でした。こうやって、これまで、イエス様を捕えようにも捕らえられなかったユダヤ人指導者たちが、ユダによってそれが可能になりました。

2A ご自分を引き渡す方 3-9

1B イエスを捕らえる者たち 3

3 それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやパリサイ人たちから送られた下役たちを連れ、明かりとたいまつと武器を持って、そこにやって来た。

ユダは案内人となっています。初めに、「一隊の兵士」となっています。ローマ軍の一単位で通常600人だそうです。なぜ、イエス様を捕えるのにローマ兵がやってくるのか？普通、ローマ軍は、ユダヤ属州の首都カイサリアのほうに駐屯していますが、ユダヤ人の祭りである過越の期間には、何か騒動が起こればすぐに対処できるように、神殿の敷地の北にあるアントニオ要塞に駐屯しています。今、ユダヤ人の間で物議をかもしている人物がいるとユダが通報したことによって、やってきたのでしょう。そして、「祭司長たちやパリサイ人たちから送られた下役たち」がいます。

ここでの彼らの用意周到さには呆れます。「明かりとたいまつと武器」です。「明かり」とは、当時のランプであり、今でいう懐中電灯です。そして、たいまつです。これによって、その場が最大限、明るくなるようにして、逃げることができないように、逃げる道を全てふさぐことができるよう身構えていたのです。そして武器を持っています。これまで、イエス様が武装した反乱でも起こしたことがあるのでしょうか？全くないですね、真逆のことを行われていました。けれども、なぜ彼らがそのようなことをしているのか？と言えば、イエス様をそれだけ恐れていることです。主が、どれほどの力強いわざを行われたのか、彼らは良く知っていました。そして、人々はイエス様に目を注いでいます。彼らに見られぬうちに捕らえなければいけないということで、夜に逮捕を決行したのです。しかし、そんなことをもってしても、イエス様が主導権を握っていることには変わりありませんでした。

2B 「わたしはそれだ」に倒れる者たち 4-6

4 イエスのご自分に起ころうとしていることをすべて知っておられたので、進み出て、「だれを捜しているのか」と彼らに言われた。

イエス様は、これから「蔑まれ、人々からのけ者にされ」ることをご存知でした。そして、「私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために碎かれ」ることもご存知でした。そして、鞭によって、

「打ち傷」を受けられることも知っていました(イザヤ 53 章参照)。これらが、預言の中にあり、父ご自身から語られていたからです。そのことを全て知っておられました。そして、そこから引き下がることなく、むしろ、「進み出て」とあります。

父のみこころから逃げることなく、ご自身のいのちを捨てる決断をすでにとっておられたのです。主は、こう言われていました。「10:18 だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。」そして、弟子たちのことも思われていたことでしょう、「15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」父への従順と、弟子たちへの愛から、イエス様は自ら、進み出て、「だれを捜しているのか」と彼らに言われた」ということです。

5 彼らは「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「わたしがそれだ」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒に立っていた。6 イエスが彼らに「わたしがそれだ」と言われたとき、彼らは後ずさりし、地に倒れた。

彼らが尋問しているのではなく、イエス様のほうが尋問しておられます。「だれを捜しているのか？」と問われ、彼らが返答すると、「わたしがそれだ」と言われたら、彼らのほうが後ずさりして、地に倒れています。イエス様はこれから捕らえられるのですが、そのことさえ、ご自分の手の中に掌握しておられたのです。

ここで、主が宣言された、「わたしがそれだ」というのは、ギリシア語で「エゴ・エイミ」です。「わたしはある」という、神の名前です。神がかつてモーセに、神の名は何かと聞かれて、「わたしは、「わたしはある」というものだ」と言われた、その名です。イエス様が、何度となくご自身を「わたしはある」と宣言されて、父とご自身が一つであることを明らかになさいました。つまり、ここで彼らが後ずさりして、地に倒れたのは、その神の名にある力と栄光を、少しだけでも彼らにお示しになったからです。主の名の前で、立っていることはできなかったということです。

ここでユダがいることは皮肉です。ユダは今、敵を引き連れており、自らもイエス様の敵となっています。だから、「わたしがそれだ」と言われた時に、一緒になって倒れているのです。以前、すぐそばで、イエス様がそう言われた時、何ともなかったのですから、人は主のもとに留まっていたら、安心する、平安でいられるのですが、敵対するならば、裁かれてしまうのだということです。

3B 弟子たちを去らせるイエス 7-9

7 イエスがもう一度、「だれを捜しているのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。8 イエスは答えられた。「わたしがそれだ、と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい。」9 これは、「あなたが下さった者たちのうち、わたしは一人も失わなかった」と、イエスが言われたことばが成就するためであった。

ここに、イエス様の弟子たちへの愛が満ちています。主が弟子たちのために、祈られていましたね。「17:12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。」あなたの御名、そうです、「わたしはある」という御名によって、弟子たちがここで捕らえられて殺されることのないように、主が守ってくださっていたのです。イスカリオテのユダについては、滅びの子であったので、最後に自殺しますが、ここにいる弟子たちは、イエス様が守って下さったので、今、ここで去ることができたのです。イエス様は、大祭司アンナスに尋問を受けて入る時も、「18:19 弟子たちのこと」が聞かれて、猛烈に大祭司に対して反論されました。これらも弟子たちを守るためであったのです。

私たちは、とかく逃げていく弟子たちが、自己中心的で、何もできない、心の弱い者たちだと否定的な評価をします。けれども、イエス様はそう見ておられませんでした。ご自身が捕らえられ、酷い目にあうのは、あくまでも父の御心があるからであり、それは罪のいけにえになることであり、このことに弟子たちは関わることはできずに、むしろ残された彼らが守られるように祈られていたのです。彼らは今の状況が分かっていないし、これから信仰が試され、試みを受けます。そのことを知っておられたので、あえて、去らせなさいと言われたのです。そして、弟子たちがようやく悟るのは、復活の姿を見る時です。

私たちは、主のために生きることを焦点に当てるし、それは良いことですが、それよりも、このようにして主に愛され、守られているということです。「ロマ 8:31 神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」主の十字架への道を見るなら、私たちは自分たちが何かをできるのだ、コントロールができるのだとみるのではなく、すべてが全くできない、いや主がすべて愛によって、してくださっているのだというところに立たないといけません。

3A 戦いではなく、父の御心 10-11

10 シモン・ペテロは剣を持っていたので、それを抜いて、大祭司のしもべに切りかかり、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。

弟子たちの中で、「何もできないのだ」という主の配慮に反して、何かをしようとしていたのがペテロであります。「13:37 主よ、なぜ今ついていけないのですか。あなたのためなら、いのちも捨てます。」と言っていたのです。いのちも捨てると言いました。けれども、主のために死ぬよりも、主のために生きるほうが難しいことがあります。彼は、主のなされることに、さらに加えて事を行なおうとしました。私たちに、それが何度となく誘惑として来ます。主がなされていることがあります。ところが、義憤であったり、義務感であったり、何かそれ以上のことをしないといけないと思ってしまうと、それはまさに、肉の行いであり、ドツボにハマる、失敗するのです。

ペテロがここで剣を持っていたのは、「剣のない者は上着を売って剣を買いなさい。」と主が言わ

れた時に、「ルカ 22:38 ここに剣が二本あります。」と答えていて、実際にあったのです。それは用心のためであったのですが、ここでイエス様のために戦うために使ってしまった。「大祭司のしもべ」に切りかかっています。おそらく、最も弱く見えた人だったのかもしれませんが。武器を手にしていなかったのかもしれませんが。切りかかって、右の耳を切り落としてしまいました。ここで興味深いのは、ヨハネは、「そのしもべの名はマルコスであった」と言っています。ヨハネは大祭司アンナスの知り合いであることを 15 節で明かしています。ですから、しもべの名も彼は知っていたのでしょう。そして、ルカによる福音書では、彼の耳をイエス様は元に戻されます。この時にも癒しの力は健在だったのです。そして、裁きではなく憐れみのわざは健在だったのです。

そして、最後にそれを使われたのは、敵に憐れみを示すこと、またペテロの失敗の尻ぬぐいをする事です。後でペテロは、マルコスの親類から、「18:26 あなたは園である人と一緒にいるのを見たと思うが。」と尋ねられます。ここまでで済んだのです、もし右の耳が切り取られていたら、ペテロに対する敵意は強く、彼も罪に問われていたかもしれません。それもイエス様が気を使って、癒しておられたのです。失敗までもしりぬぐいをされる方なのだ、ということです。

11 イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を飲まずにいられるだろうか。」

「剣をさやに収めなさい。」と言われたイエス様ですが、ペテロがイエス様のことが本当に好きだったことは知っておられます。だから、戦おうとしたのです。けれども、やはり神の御心を行うということ以外に、何かを付け加えようとしたら、そこで肉の行いになり、そして世のものとなってしまいます。主のために、イエスの名のためにといいながら、世に対して神の戦いではなく、自分自身も世の者としての戦いをしてしまうのです。ピラトの前に、イエス様が証言をされた時に、「18:36 わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったでしょう。」と言われました。これがペテロがやろうとしたことです。イエス様を王とする国は、この世のものではないのです。もしこの世のものであったら、ペテロのしたように戦ったのです。しかし、それをやめるように、イエス様はされました。さもないと、イエス様の国が、いつの間にかこの世の国になってしまいます。イエス様の国が広がるのは、あくまでも、主が言われたことの中に留まる時です。

そして、「父がわたしに下さった杯を飲まずにいられるだろうか。」と言われます。これが、先に話した、「神の御怒りの杯」です。主がそれを飲み干すように定められていた、これが御心です。私たちが悟るべきは、自分自身がキリストと共に十字架につけられたということです。「ガラ 6:14 この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」十字架を越えて、私たちは成長することはできません。いつまでも、十字架の陰にとどまり、神に愛されている者としていきます。そして、よみがえりの主に出会って、そこで初めて、驚くような恵みが始まるのです。